

平成 23 年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2012

新潟県長岡市教育委員会



例　　言

- 本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査のうち、平成23年度国庫・県費補助金の交付を受けて実施した調査の報告である。
 - 調査主体は長岡市教育委員会科学博物館である。
 - 本文の執筆は、新田（1・3）、小林（2）、山賀（4）で分担した。編集は新田が行った。
 - 遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。
 - 出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は長岡市教育委員会が保管している。
 - 現地調査から本書の作成に至るまで多くの方からご協力、ご教示を賜った。記して御礼を申し上げる（五十音順・敬称略）。
- 国土交通省北陸地方整備局国営越後丘陵公園事務所　中之島土地改良区　らう造景株式会社
石坂圭介　駒形敏朗　加藤勝博

目　　次

1 平成23年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2 中之島南部地区試掘調査	3
3 転堂遺跡確認調査	4
4 南河内の塚5号確認調査	12



第1図　長岡市の位置



写真1　調査風景（中之島南部地区）



写真2　調査風景（南河内の塚5号）



1 平成 23 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

平成 23 年度に長岡市教育委員会が実施した遺跡の試掘・確認調査は 3 件である（平成 24 年 2 月 1 日現在）。原因別の内訳は、県営は場整備事業・個人住宅建設・国営越後丘陵公園内園路整備が各 1 件であった。このほか、諸開発に伴う工事立会を 7 件実施している。新長岡市誕生以降に実施された試掘・確認調査は、平成 17 年度 10 件、18 年度 12 件、19 年度 20 件、20 年度 17 件、21 年度 13 件、22 年度 9 件であり、平成 19 年度をピークとして調査件数が減少傾向にある。こうした傾向を踏まえつつも今年度の調査件数は少ないと言えるだろう。寺泊地域や小国地域などで継続的に実施されてきた県営は場整備事業や越路地域での市道改良事業に伴う試掘・確認調査に区切りがついたことが大きな要因であり、その一方で、開発件数自体が減少し、厳しい経済情勢を反映してか、道路に対してより影響が低くなるよう開発行為が計画・実施が策定されているという側面もある。なお県営は場整備事業については、試掘・確認調査の結果をもとにした協議が進められており、平成 19 年度から順次本発掘調査が実施されている。今年度実施した浅田遺跡と五百刈遺跡の本発掘調査は平成 17・18 年度の確認調査、天王遺跡の本発掘調査は平成 19 年度の確認調査の結果をもとにした取扱い協議によるものである。

つづいて、本年度の試掘・確認調査の結果について概観する。本年度実施した 3 件のうち、遺構や遺物が検出されたのは 2 件である。遺跡の新発見はなかった。

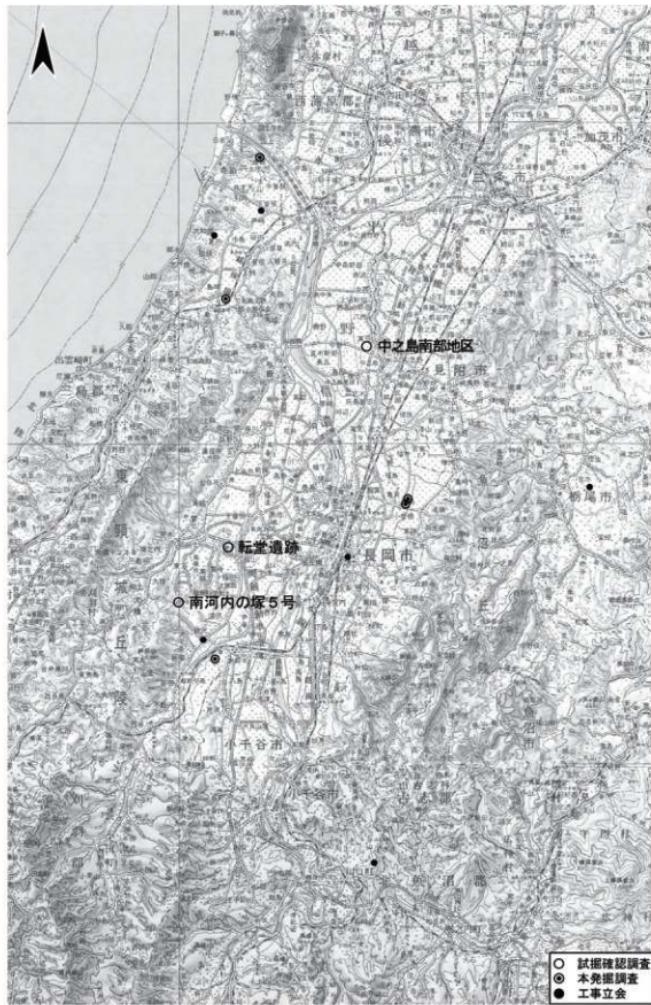
県営は場整備事業に伴う中之島南部地区の試掘調査では、遺物が少量出土した。明確な遺物包含層や遺構が検出されず、本発掘調査は不要と判断した。

個人住宅建設に伴う転堂遺跡の確認調査では、フラスコ状土坑 2 基を含む土坑 6 基と、縄文時代中期前葉から中葉にかけての遺物が多量に出土した。この確認調査は最終的に掘削範囲全域を対象としたため、その後の本発掘調査は不要とした。

国営越後丘陵公園内の園路整備事業に伴う南河内の塚 5 号の確認調査では、塚の範囲を把握するために合計 4ヶ所のトレンチを設定したが、人為的な盛土や周溝、遺物を検出するには至らなかった。

第 1 表 平成 23 年度長岡市内遺跡調査一覧（本書掲載の調査はゴシック体で示した）

地域	地区	調査原因	結果など
寺泊	弥助遺跡	県営は場整備事業 立会	（遺構・遺物なし）
寺泊	三反田南遺跡	県営は場整備事業 立会	（遺構・遺物なし）
和島	天王遺跡	県営は場整備事業 本調査	土坑/溝/平安時代の土器/珠洲焼
中之島	浦反前東遺跡	河川改修工事 本調査	平安時代の柱穴/須恵器/土師器
中之島	中之島南部地区	県営は場整備事業 試掘	遺構なし/平安時代の須恵器/近世陶磁器
柄尾	柄倉遺跡	土砂採取 個人住宅等解体撤去 立会	（遺構・遺物なし） （遺構・遺物なし）
越路	立矛遺跡	市道建設 本調査	掘立柱建物跡/縄文土器/弥生土器
長岡	転堂遺跡	個人住宅建設 確認	縄文時代の土坑/土器/石器
	南河内の塚 5 号	園路整備 確認	（遺構・遺物なし）
	浅田遺跡	県営は場整備事業 本調査	遺構なし/弥生土器/平安時代の土器
長岡	五百刈遺跡	県営は場整備事業 本調査	土坑/弥生土器/平安時代の土器
	長岡城跡	個人住宅解体撤去 立会	（遺構・遺物なし）
親沢地区		天然ガスブランケット幅工事 立会	（遺構・遺物なし）
川口	木沢行塚遺跡	携帯電話鉄塔建設 立会	（遺構・遺物なし）



第2図 平成23年度調査位置図 (1/250,000)



2 中之島南部地区試掘調査

調査地 長岡市野口・六所 地内 調査面積 294.0m² (対象面積 264.0m²)
 調査期間 平成 23 年 10 月 6 日～11 月 29 日 調査担当 小林 徳

調査に至る経緯 平成 22 年 8 月に新潟県三条地域振興局農村整備部と長岡市教育委員会（以下、市教育委員会）は、県営は場整備事業中之島南部地区工事における埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。当事業は平成 23 年度以降を予定しており、秋口の稲刈り後に工事を行う予定であるが、工事前に試掘調査を行うことで協議が一致した。ただし、予算等により工事時期が前後する可能性があるため、詳細については再度協議を持つことになった。その後、工事時期が稲刈り後と決まったため、平成 23 年 4 月に再度協議を行い、調査範囲と時期を確定した。この決定に従って、市教育委員会は 9 月より調査の準備を行い、調査体制を整えた。

調査地の概要 調査地は信濃川と刈谷田川に挟まれた冲積低地に位置し、一帯は氾濫などにより被害を受ける「流れ処」と呼ばれるような場所である。調査地の東には刈谷田川の自然堤防が形成され、六所や野口などの集落がこれらの自然堤防上に存在している。

調査の結果 調査は、地権者との間連で 2 回に分けて行われた。第 1 回目に 10 月 6 日～11 日のうち 3 日間、2 回目として 11 月 22 日～29 日のうち 3 日間の合計 6 日間の調査を行った。トレーニチは 2 × 3 m の大きさのものを水路計画地上に任意に設置して、バックホウにて慎重に掘削を行った。

調査の結果、各トレーニチから遺構は見つかなかったが、第 4 トレーニチ、第 11 トレーニチ、そして第 16 トレーニチにおいて、遺物が見つかった。第 4 トレーニチでは須恵器の环の底部片が第 II 層から、第 11 トレーニチでは須恵器壺の脚部片が第 IV 層から、第 16 トレーニチでは近世の所産と見られる陶磁器が第 II 層から検出し、周辺を慎重に調査したが、その他の遺物・遺構の検出はなく、遺跡とみとられる痕跡を見出すことはできなかった。このため、工事実施は支障がないことを事業者に伝えた。



写真3 第4トレーニチ土層断面

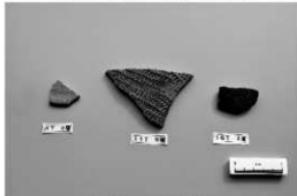


写真4 出土遺物



第3図 トレーニチ配置図 (1/16,000) 及び土層図 (1/40)



3 転堂遺跡確認調査

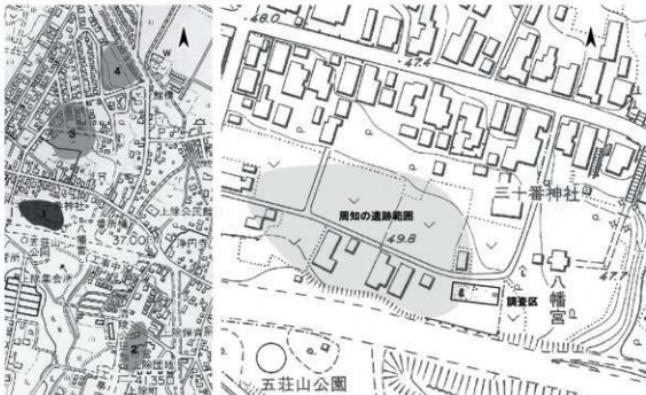
調査地 長岡市上除町 1910-5 調査面積 176.6m² (対象面積 1766m²)
 調査期間 平成 23 年 4 月 14 日～17 日 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 平成 22 年 7 月 12 日、個人住宅建設に係る埋蔵文化財の取扱いについての照会があった。照会地の一部が転堂遺跡の範囲に及ぶため、当該地での開発行為に際しては事前の届出と、確認調査が必要となる旨を回答した。その後、事業者から新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）に平成 23 年 3 月 25 日付けで文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の届出がなされた。これに対し、県教育長から長岡市教育委員会教育長に平成 23 年 4 月 4 日付け教文第 16 号に事前に確認調査を実施するよう通知された。これを受けて、長岡市教育委員会は県教育長に対して平成 23 年 4 月 12 日付け長教博第 14 号で文化財保護法第 99 条の規定による発掘調査の着手を報告し、確認調査を開始した。

調査地の概要 調査地は信濃川支流弘川の右岸に形成された舌状台地端部に位置する。この舌状台地は南側と東側の斜面が急で、これに比して北側が緩やかである。周辺では舌状台地が発達しており、そこに遺跡が営まれる傾向がある。転堂遺跡の東には、弘川を挟んで、南原遺跡が立地する（第 4 図 2）。南原遺跡は绳文時代中期初頭～末葉、とりわけ中期前葉～中葉の大規模な集落跡である。平成 3 年（1991）に確認調査（長岡市教委 1992）、平成 5 年（1993）には本発掘調査（長岡市教委 1994）が実施されている。転堂遺跡の北には浄円寺遺跡（绳文時代・第 4 図 3）、その北には上除城跡（中世・第 4 図 4）が知られている。

転堂遺跡は「日本石器時代遺物発見地名表」（1928）などにも記載されているように、古くから知られた遺跡である。火焔土器の発見で知られる近藤家も積極的な踏査を行い、遺物を採集している。

調査の方法と経過 対象地は更地であったが、個人住宅が建っていた過去があり、遺跡が相当な搅乱を受けていることは明らかであった。このため、今回新築される住宅の計画平面全体において表土及び搅乱土層を削除し、その後、遺跡の残存部分を調査することとした。



第 4 図 周辺の遺跡 (1/10,000) 及び調査位置図 (1/2,000)



4月14日に調査を開始。調査区東端からバックホウを用いて表土剥ぎを行い、包含層の遺存を確認できた部分について順次人力で掘削した。15日午後には遺構確認作業を行い、その後、遺構掘削を開始した。SK 1～4は15日、SK 5は16日に完掘した。16日夕方の時点では、SK 6の完掘に至っていなかったが、用地の引渡し期限が迫っていたため、調査区全体写真を撮影後、SK 6付近以外を埋め戻した。そして17日にSK 6を完掘し、18日に残り部分を埋め戻して、調査を完了した。

調査の結果 調査によって土坑6基と遺物861点を検出した。検出遺構はフ拉斯コ状土坑2基と土坑4基であり、出土遺物は縄文土器759点・クロロ土師器片(裏)1点・石器51点・繩53点である。縄文土器は中期前葉～中葉が主となる。石器は、石礫1点・打製石斧1点・石皿1点・彫刻石皿1点・磨石類33点・剥片類12点・分類不明2点で構成される。

調査前の予想どおり、調査区全体が擾乱を受けしており、特に中央部ではⅣ層上面まで擾乱が及んでいたが、東側と西側で包含層が部分的に遺存していた。これによりⅠ層=表土・擾乱層、Ⅱ層=黒褐色土層、Ⅲ層=茶褐色土層、Ⅳ層=黄褐色風化火山灰土層とする堆積を把握した(第5図)。Ⅱ層は調査区東側で遺存が良く、遺物もまとまって出土したが、遺構を検出した調査区西側での遺存状況は悪かった。一方、Ⅲ層の遺存状況は東側が悪く、西側が良かった。Ⅲ層からの遺物出土はごく少量であった。Ⅲ層上面では、散漫だが環状に疊が分布する状況を確認したが(第5図)、これを意図的な配置と断定するには至らなかつた。疊は29.5～161.84 g(平均455.2 g)で、安山岩の完形疊が多くを占めるが、磨石類も含まれる。

続いて検出遺構と出土遺物について概述する(第5～8図)。SK 1は平面形態が橢円形、断面形態が弧状を呈する土坑である。長径35cm、確認面から底面までの深さは11cmを測る。遺物は出土していない。SK 2は平面形態が橢円形、断面形態が弧状を呈する土坑である。長径25cm、確認面から底面までの深さは7cmを測る。遺物は出土していない。SK 3は平面形態が橢円形、断面形態が半円状を呈する土坑である。長径44cm、確認面から底面までの深さは24cmを測る。遺物は出土していない。

SK 4は平面形態が橢円形、断面形態が略漏斗状を呈する土坑である。1層からは彫刻石皿と磨石類とがまとまって出土し、2層は炭化物が含まれていた。出土遺物は縄文土器2点・石器6点(磨石類5・彫刻石皿1)の合計8点で、3点を図示した(第6図1～3)。1と2は半截竹管状工具で半隆起線を描く一群で、中期前葉に位置づけられる。3は安山岩製の彫刻石皿。側面に葉手状の渦巻文が陽刻される。

SK 5は平面形態が略方形、断面形態が弧状を呈し、底面中央にピットを作う。遺構上面が削平されたフ拉斯コ状土坑である。長径189cm、確認面からの底面までの深さは14cm、底面ピットの深さは12cmを測る。北西の飛び出し部分は別遺構の可能性があるが、切り合い関係を含め、それを確認することはできなかつた。遺物は縄文土器93点・石器7点(石皿1・磨石類3・剥片3)・繩3点の合計103点出土し、このうち10点を図示した(第6図4～13)。4・5は中期前葉の北陸系土器である。半截竹管状工具で施文される。6は内屈する口縁をもつ土器で、口縁部～頸部は無文とし、横位区画が入らず、胴部に撲糸文が施される。このような構成をもつ土器について類例を知らないが、魚沼市清水上遺跡SI 1263 A出土の無文土器(57)の存在から、中期前葉の北陸系土器群に伴う粗製深鉢だと推測される。7は浅鉢の突起であろう。下部には縄の側面圧痕が施されている。8～13は中期中葉の土器群である。8は袋状突起。9は隆帶と隆線で渦巻文を描くもの。10・11は口縁部資料で、10では隆線が、11では平行沈線が施されている。11の抬土には鰯骨が多く含まれ、非常にもらい。12と13は胴部資料である。

SK 6は平面形態が円形、断面形態が袋状を呈するフ拉斯コ状土坑である。底面東側にピットを作う。遺構覆土は炭化物を含む層と含まない層との互層をなしていた。底面のピットは遺構東壁に連続して非常



にしっかりと掘り込まれており、覆土には炭化物が多量に含まれていた。長径145cm、確認面から底面までの深さは41cm、底面ピットの深さは20cmを測る。遺物は繩文土器165点・石器26点(打製石斧1・石皿1・磨石類18・剥片類5・不明1)・羅28点の合計219点出土し、このうち28点を図示した(第6・7図14~41)。14~23は中期前葉の北陸系土器群である。14~20は口縁部から頭部にかけての破片資料で、半截竹管状工具による施文が特徴的である。このうち、18は口縁部に半隆起線文と爪形文が、胴部には撫糸文が施される。撫糸文の上端には半截竹管状工具による逆U字の刺突が連続的に加えられる。蓮華文の変形であろうか。21は胴部資料で撫糸文が施されている。22~23は浅鉢である。22は沈線が連続的に入るが全容は不明である。23は遺構南壁付近から出土したもの。口縁部は内屈し、口唇部は立ち上がる。口唇は肥厚し、端部に一条の沈線がめぐる。そして、内側に突起が付く。配置にややバランスを欠くが、4単位になると解釈される。胴部は無文である。24~27は中期中葉の土器群である。24は五丁歩道跡に特徴的な隆帶文を多用する土器群に含まれよう。25・26は半截竹管状工具による半隆起線が施文されている。27には地文に繩文が確認される。28~40には粗製土器をまとめた。これらについては中期前葉~中葉という時間幅でおさえておきたい。28~31は口縁部資料であり、口縁部は無文となる。28は突起をもち、繩文(合撫か?)が施される。29~30は口唇部が肥厚するもの。32~38は胴部資料である。39~40は底部資料である。ともに偏物圧痕が確認されるが、39のものはスダレ状圧痕だと推測される。さらにこの資料では、重心こそれているものの、一对の対向する抉りが作出されており、土錐への転用を示唆する。41は安山岩製の打製石斧。裏面には主要剥離面を大きく残しており、刃部は片刃状となる。

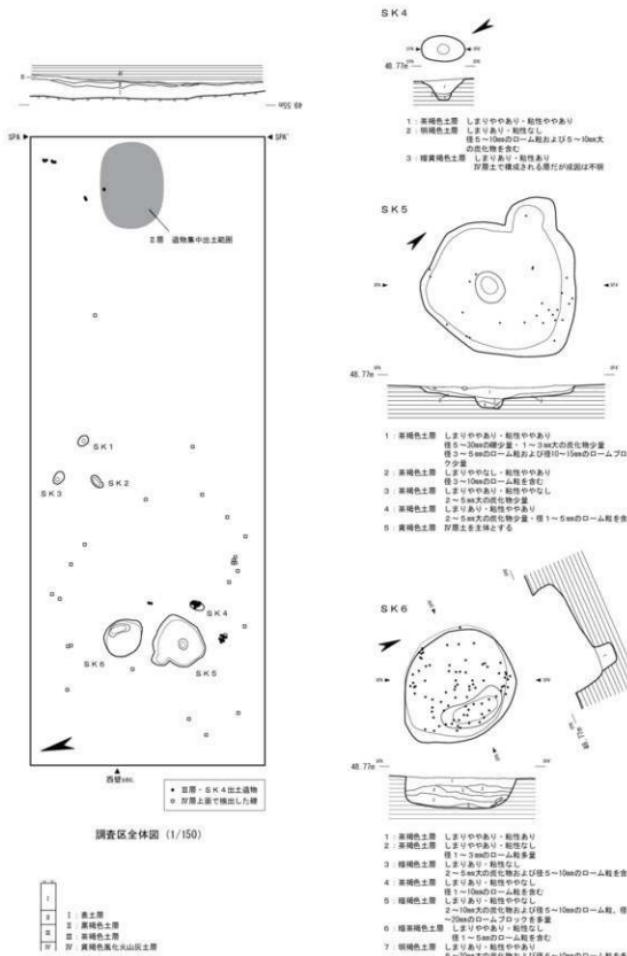
包含層出土遺物を第7・8図に示す。42~46は表土及び調査区周辺で採集した土器である。42~45は火炎土器である。46は綾杉文が施される土器で、大木8b式並行の在地系土器に分類される。

47~66はII層出土の土器である。47・48は繩の側面圧痕を横位区画とし、口縁部を無文帯とする。49は爪形文が施される。50~54は火炎土器である。50は王冠型土器の突起である。55~59は大木8b式に並行する在地系土器である。55~57は綾杉文、58~59には渦巻文が施される。さらに59では縱方向に連続する刺突もみられる。60は刺突文が施されている。中期中葉に帰属するものであろうか。充填文の可能性もある。61はキャリバー形深鉢の口縁部で、口唇部に隆帯と隆線がめぐる。胎土には雲母が入る。62は大木9式並行の土器。断面三角形の隆帯がつく。63~66は繩文、67は撫糸文が施される。

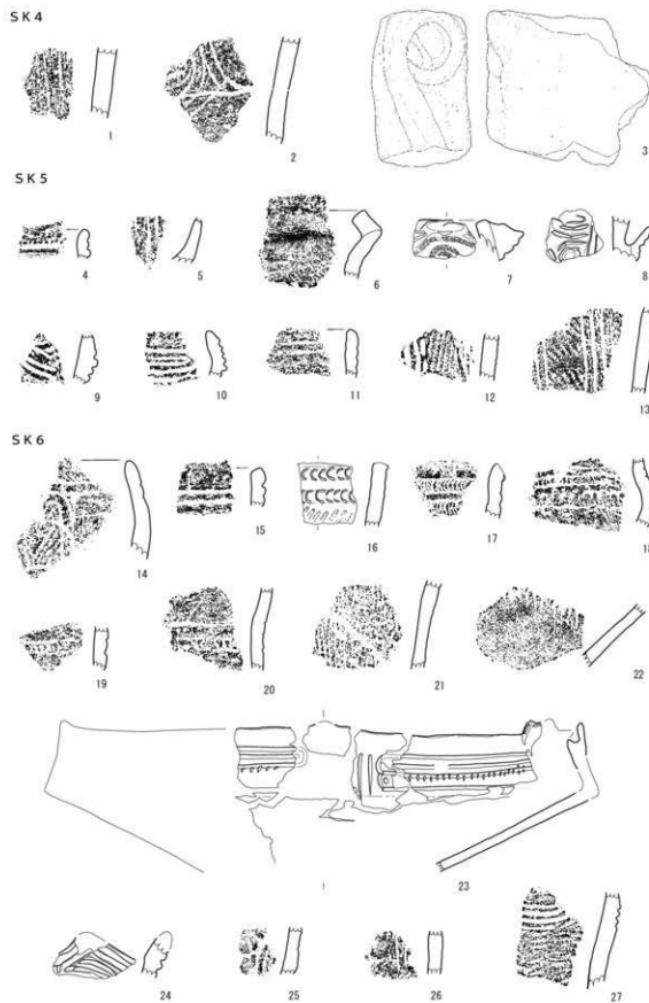
68~76はIII層出土の土器である。68は綾杉文が施される土器で、これも大木8b式並行の在地系土器に分類される。73~76はSK5の南でまとめて出土したもので、ここに浅い遺構が存在した可能性がある。74は無文で、上端に孔が穿たれている。73・75・76は繩文が施される。73は胴部が膨らむ形状の深鉢で、波状口縁をもつ。75は繩文が縦位の帯状に施文される特徴がある。

まとめ 調査対象範囲全体に対して発掘調査を実施して記録保存した。このため、更なる埋蔵文化財保護行政上の措置は必要ないが、慎重に工事を進めるよう事業者に要望した。

調査区では包含層が大きく搅乱を受けていたものの、遺構は比較的良好に遺存していた。集落構造における貯蔵穴の在り方にについて検討を重ねる必要があるが、現時点では今回検出した遺構の分布、具体的にはSK1をもって集落東縁とし、したがってII層の遺物分布は2次的なものと捉えたい。覆土から遺物が出土した3基の遺構については、その内容からSK4・SK6は中期前葉に、SK5がそれよりやや新しい時期に構築されたと推測できる。時期差をもって貯蔵穴が構築されていることは、転堂遺跡がこの時期において拠点性を有していたことを物語る。近接地において同時期に営まれた大規模集落、南原遺跡との関係がいかなるものであったのか、興味深い。



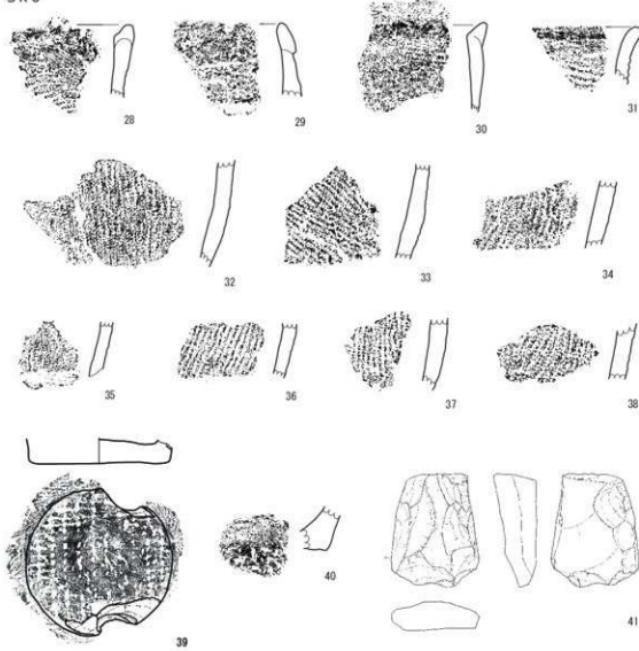
第5図 調査区全体図及び遺構図



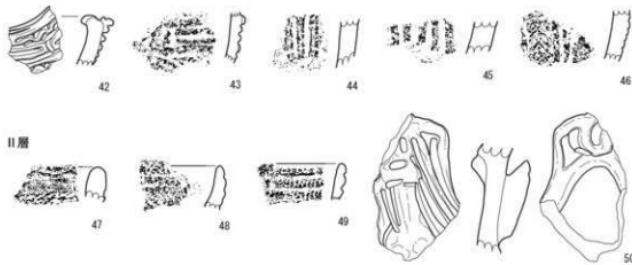
第6図 遺物実測図① (1/3)



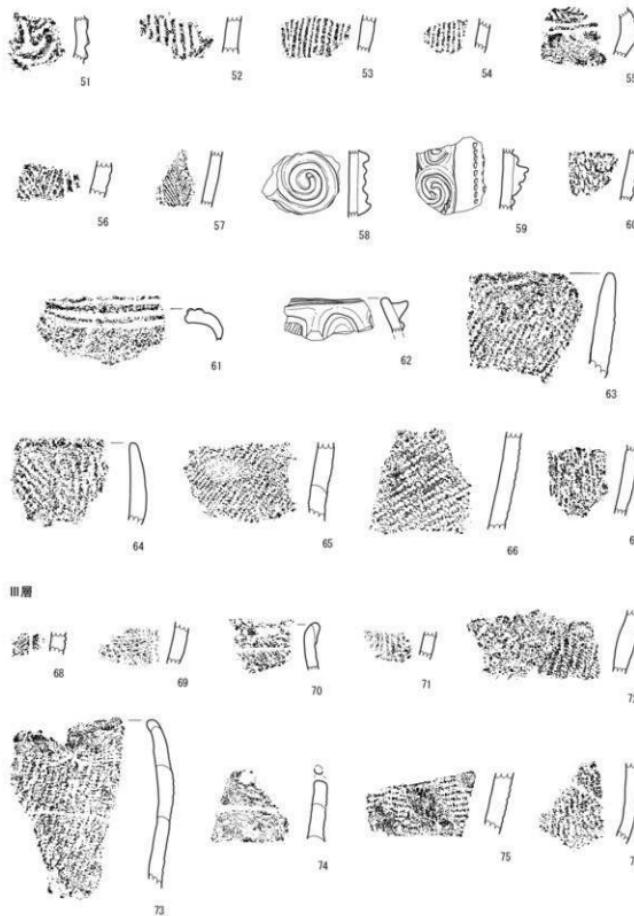
SK 6



表採



第7図 遺物実測図② (1/3)



第8図 遺物実測図③ (1/3)





写真5 調査区完掘状況（西から）



写真6 調査区西壁断面（東から）



写真7 SK 4 遺物出土状況（北から）

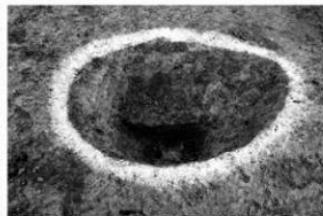


写真8 SK 4 半截状況（下部・西から）



写真9 SK 5 遺物出土状況（東から）



写真10 SK 4 · 5 完掘状況（東から）

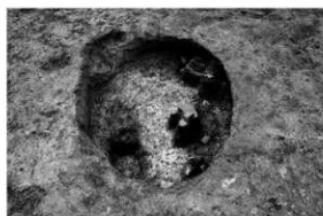


写真11 SK 6 遺物出土状況（北から）

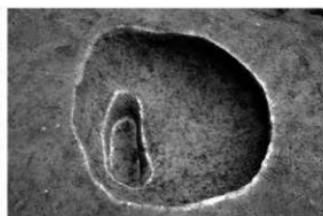


写真12 SK 6 完掘状況（北から）



4 南河内の塚5号確認調査

調査地 長岡市親沢町 地内

調査面積 120m² (対象面積 40m²)

調査期間 平成 23 年 4 月 26 日～4 月 27 日

調査担当 山賀和也

調査に至る経緯 国営越後丘陵公園内で園路整備が計画され、平成 21 年 12 月、長岡市教育委員会は、事業者である国土交通省北陸地方整備局国営越後丘陵公園事務所と道路の取扱いについて協議を行った。事業計画地付近に南河内の塚 5 号が位置することから、現地確認及び事業計画図面を精査し、その結果、現況で道路は不明瞭だが、断面形から周溝が存在する可能性があったため、確認調査を行い今後の本発掘調査の要否を判断することとした。

調査地の概要 調査地は、東頭城丘陵から派生する八石丘陵上に位置しており、標高は約 230m である。南河内の塚群は、尾根上に位置しており、合計 5 基登録されている。周辺には、片刈城跡、水梨城跡、鷹射城跡などの中世の山城が存在している。

調査の結果 調査は、4 カ所に任意のトレンチを設定し、人力で掘削した。遺跡は塚であるため、人為的な盛土が存在することから、慎重に調査を行った。その結果、調査地点は、暗褐色の表土が 20 ~ 40cm 堆積し、その下に砂利まじりの浅黄色土が堆積しており、人為的な堆積は見られなかった。また、遺構・遺物も発見されなかつたため、開発予定地には遺跡は存在しないと判断し、事業者にその旨を伝えた。





参考文献

加藤三千雄

2008 「新保・新崎式土器」 小林達雄編『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション 450-457 頁

寺崎裕助

2008 「火炎土器」 小林達雄編『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション 458-458 頁

長岡市

1992 「長岡市史」資料編 1 考古 長岡市

長岡市教育委員会

1992 「長岡市内道路発掘調査報告書 石動地区 南原道路 栖吉地区」 長岡市教育委員会

1994 「南原道路」 長岡市教育委員会

2006 「平成 17 年度長岡市内道路発掘調査報告書」 長岡市教育委員会

2007 「平成 18 年度長岡市内道路発掘調査報告書」 長岡市教育委員会

2008 「平成 19 年度長岡市内道路発掘調査報告書」 長岡市教育委員会

2009 「平成 20 年度長岡市内道路発掘調査報告書」 長岡市教育委員会

2010 「平成 21 年度長岡市内道路発掘調査報告書」 長岡市教育委員会

2011 「平成 22 年度長岡市内道路発掘調査報告書」 長岡市教育委員会

中野幸大

2008 「大木 7a ~ 8b 式土器」 小林達雄編『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション 352-359 頁

中村孝三郎

1966 「先史時代と長岡の道路」 長岡市立科学博物館

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

1996 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集 関越自動車道之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上
道跡Ⅱ」 新潟県教育委員会

松永萬知

2006 「編み物」 佐藤雅一、佐藤信之編『津南学叢書第 4 桁 火焰土器の時代—その文化を探る—』 津南町教育
委員会 17-18 頁

2008 「網代・敷物」 小林達雄編『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション 952-945 頁
和島村教育委員会

2003 「和島村埋蔵文化財調査報告書第 15 集 北野丸山遺跡」 和島村教育委員会



報告書抄録

ふりがな 書名	へいせいにじゅうさんねんどながおかしないせきはくつちょうさほうこくしょ 平成23年度長岡市内道路発掘調査報告書					
著者名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
著者名	新田康則・小林徳・山賀和也					
編集機関	長岡市教育委員会					
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1					
発行年月日	2012年3月19日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみかわのいわくらごと 南河内の保5号	ながおかしむやまちともらみやかわのいわくらごと 長岡市新潟町南河内1908	152021	37°25'06" 138°44'29"	20110426 20110427	120m ²	試掘・確認調査
このびどいわくら 転交遺跡	ながおかしむやまちともらみやかわのいわくらごと 長岡市上荒町1910-5	152021	37°27'04" 138°46'54"	20110414 20110417	1766m ²	試掘・確認調査
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
こしきどいわくら 転交遺跡	遺物混合堆	縄文時代	土坑	縄文土器（中期前葉～中葉）・石器		縄文時代中期の円筒穴を2基検出
みなみかわのいわくらごと 南河内の保5号	塚	不明	なし	なし		なし

平成23年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書

平成24(2012)年3月19日 印刷

平成24(2012)年3月19日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 株式会社第一印刷所

